

江戸時代天明三年の浅間山泥流に埋没した建物の調査から

—— 群馬県佐波郡玉村町上福島中町遺跡で発見された建物について ——

小 野 和 之

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. 泥流により埋没した建物跡 |
| 2. 遺跡の概要 | 5. VI区1号建物跡の調査 |
| 3. 天明三年浅間山大噴火と泥流 | 6. おわりに |

—— 論文要旨 ——

関東山地の北西、長野・群馬両県境に屹立する標高2,568mの浅間山は、日本における有数の活火山として知られている。有史以来噴火を繰り返し、多くの被害をもたらした山である。この浅間山が江戸時代後期に大噴火を起こし、この際発生した泥流は吾妻川から利根川に流れ込み、兩岸の村々に多大の被害をもたらした。この噴火と泥流による犠牲者は記録によれば1,400人を越したとされている。

群馬県佐波郡玉村町に所在する上福島中町遺跡はこうした村の一つで、河川改修に伴う発掘調査の結果、泥流に埋まった建物や畑、道などが当時の様子をそのままに現した遺跡として注目された。

この時の被害の様子は多くの古文書等に記され、そうしたものの研究から被害の様子はかなり詳細になって来ているものの、具体的な資料提示としての発掘調査は、これまでは主として畑跡が中心で、建物しかも一般の民家の調査例は極めて乏しく、今回の調査が多く新しい所見を提供するものとして注目される所以でもある。

小稿では上福島中町遺跡において調査された建物跡の内、壁や床などの建物の構造を、具体的に窺い知ることのできる調査例となった建物跡（VI区1号建物跡）を取り上げ、その調査結果から建物構造に迫り、さらには泥流埋没時の状況を考えて行きたい。

キーワード

対象時代 江戸時代

対象地域 群馬県

研究対象 天明泥流 民家構造

1. はじめに

上福島中町遺跡は佐波郡玉村町上福島中町に所在している。利根川の河川改修工事に伴い、平成13年6月から平成14年11月（平成14年8・9月を除く）まで発掘調査が行われた。

調査の結果、古墳時代～江戸時代にかけての遺構、遺物が検出された。それぞれの遺構面はシルト質、あるいは微砂質土で覆われていた。特に中世以降（利根川変流以後）については利根川の影響を幾度となく受けてきたことが堆積土層の様子から窺える。

今回取り上げる江戸時代に関しては、洪水で覆われた面と天明泥流で覆われた2面が明瞭に確認されている。小稿では極めて遺存状況が良好であった天明泥流に埋没した建物跡に関して、観察結果から導き出された、いくつかの所見を述べることにしたい。

2. 遺跡の概要

上福島中町遺跡は天明三（1783）年の浅間山大噴火に伴う軽石（As-A）、およびこれに伴って発生した大規模な泥流によって埋没した遺跡である。

利根川の左岸に位置し、標高は現地表面で約69mである。調査区は現在の堤防下を含む幅約50m、長さ約300mにわたっている。

検出された天明三年の遺構面は、厚さ5～10cm程の軽石と、その上に0.5mから1.5mもの厚さに堆積した泥流によって覆われていた。

調査の結果、建物跡と、これに付随する井戸や便所さらには屋敷を取り巻くように造られた畑、道、溝などが発見されたのである¹⁾。また、建物内からは当時の生活具が数多く出土しており、埋没した日時が抑えられることから、資料としても注目される。

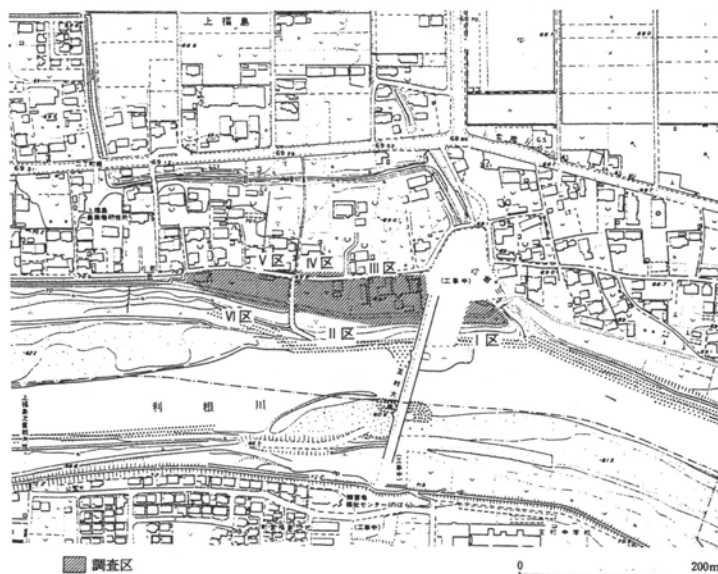


図1 上福島中町遺跡調査範囲

3. 天明三年の浅間山噴火と泥流

群馬、長野県境に位置する浅間山が、未曾有の大噴火を起こしたのは、天明三（1783）年8月5日のことであった。数ヶ月前より噴煙、軽石などを度々噴出し、群馬、長野両県に被害をおよぼしていたが、ついにこの日を迎えたのであった。この大災害の様子は県内はもとより県外においても様々な文書、絵図に記され今日に伝えられている。

利根川を流れ下った泥流が上福島村に到達したのは8月5日（新暦）午後2時前後であった。地元の言い伝えによればこの日昼過ぎ、利根川の様子がいつもと違い、不安に思った人々がいぶかしく見ていたところ、突然今まで流れていた川の水が急激に減少し枯れ川になってしまった。そしてしばらくすると遠く上流の方からカラカラと石がぶつかり合うような音が聞こえ、その音が次第に大きくなって来たと同時に、真っ黒な泥水が津波のように利根川を流れ下り、堤を乗り越え兩岸に溢れ、家や畑を呑み込んでしまったということである。この話の真偽はともかくとしても、そのときの様子はこれに近いものであったろうと察せられる。

古記録によればこの泥流により上福島村では、家101軒の内49軒が流出、あるいは泥入りの被害を受けたとある²⁾。今回検出された建物は後者の被害を受けた家と考えられる。

4. 泥流により埋没した建物跡

上福島中町遺跡において検出された遺構としては、建物10棟、便所6棟、井戸が2基、畑、溝、道等である。建物はいずれも川原石を用いた礎石を長方形に配している。建物の建つ場所は周囲から約20cm程高くなっている。遺跡内にはほぼ全面軽石に覆われた状態であったが、建物内には軽石が見られなかったことから、軽石降下時には屋根があり、建っていたことが分かる。建物は泥流に直接覆われた状態で、残された遺物に関しても同様であった。当初は建物の柱や壁などの構造物は残っていないと見られたが、調査を進めて行く中で柱の痕跡、壁、さらには床材の存在が明らかになった。

各家の中には竈や囲炉裏が作られており、当時使われていた陶磁器類、銭、煙管さらには石臼などが出土している。囲炉裏はいずれの家にも見られ、土間と座敷の間に作られているものが主体を占める。大きさは約1m四方（やや長方形のものもある）で、板材などは残ってはいなかったが、焼土がほぼ正方形に回り、中には炭化物、灰が検出されている。また北東隅部分に竈状に作られた施設を持つものも見られる。

出土遺物は当時使われていた生活用具である陶

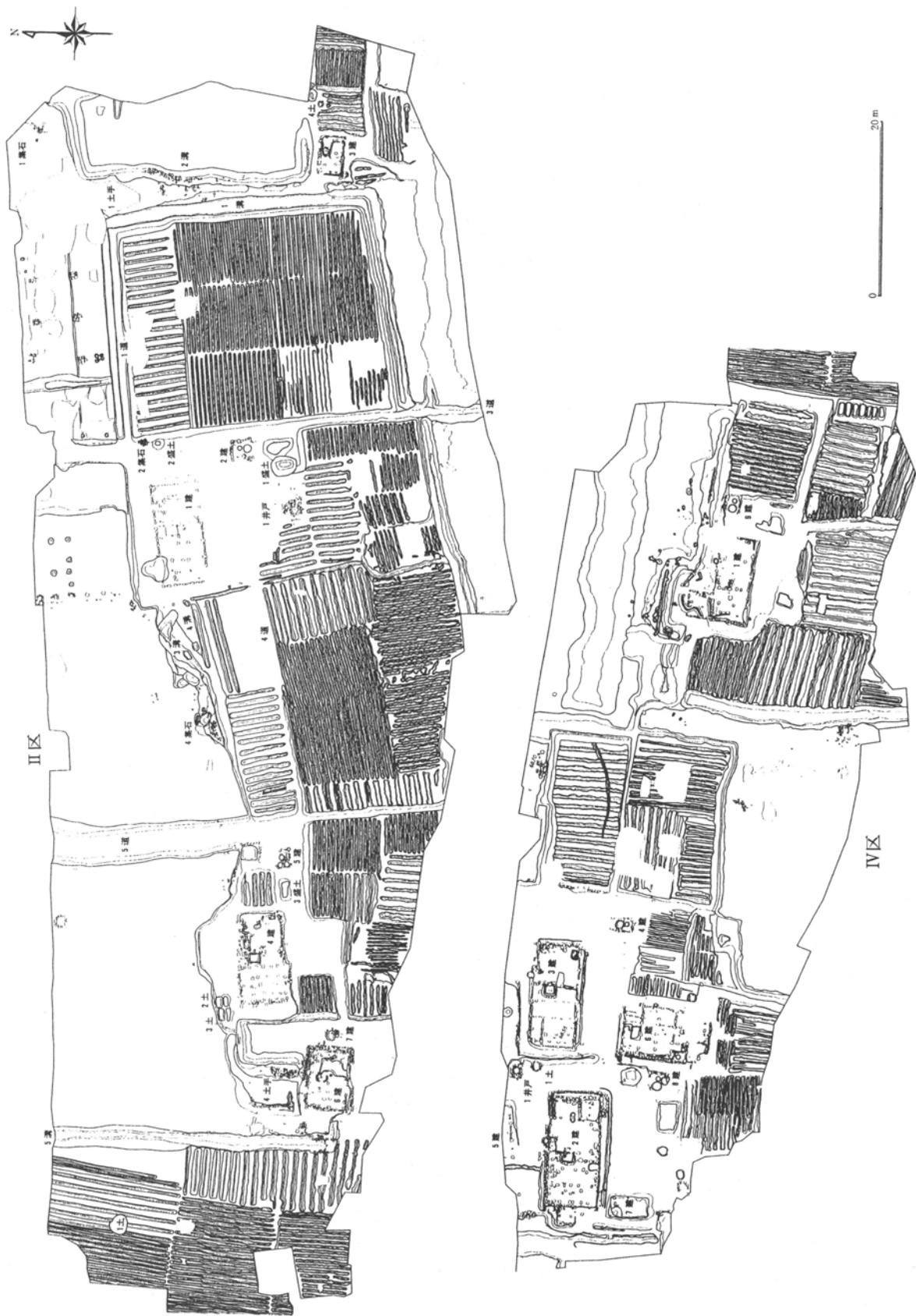


図2 上福島中町遺跡全体図

磁器類、鉄器類、煙管などの銅製品、銭、石臼などである。また、屋根や柱材などはほとんど残っていないが、木材が腐食して空洞になったところに砂が入り込んでおり、外壁を支える柱に関してはその構造が明瞭に観察できる。

井戸は深さは4 m以上である。内部は川原石が円形に丁寧な積み、周りにも敷かれたように比較的平らな石が置かれていた。便所は4棟が検出されている、礎石が長方形に配され、おそらく西側が開いた上屋があったと考えられる。木桶が埋め込まれた円い大小の土坑が南北に2カ所並んで検出されている。

畑は庭の面より一段高くなっており、畝は南北および東西方向のものが見られる。やや畝幅の狭いものと広いものがあり、作られていた作物の違いと思われる。屋敷の北側には東西、および南北に走る一段低くなった道状の遺構が検出されている。遺構面は平坦で硬く締まっており、赤茶色で明瞭に認識される。これらの遺構の埋没状況については直接覆う軽石(As-A)の厚さは約5 cm(土圧等で圧縮されていることも考えられる)で、遺跡全面を覆っていた。この軽石については除去したり集めたりした様子は認められなかった。また建物内には見られず、雨落ち溝の部分で切れ、厚みが増している。これは屋根に降下した軽石が下に落ち、厚くなったものと考えられる。このことから、建物の四方の雨落ち溝および軽石の厚さを見ることで、屋根構造が寄せ棟か切妻であったかの傍証にもなり得る。

調査区内で確認された泥流の厚さは1.5 m前後で、かなり大形の火山成の礫も多く含んでいた。かなりの勢いで流下してきたはずであるが、直前に堆積した軽石を巻き込んだり、押し流したりした状況は見られなかった。また、現状で確認される泥流の厚さが堆積当時とあまり変わっていないと考えられることなどから。埋没時には建物の上部分は出ていたものと思われる。

泥流は床下部分も含み、建物の隅々にまで流れ込んでいる。内部に置かれていた遺物についても総て直接泥流に覆われているという状況であった。また、建物内部に流れ込んだものと、外側にある泥流を観察してみると、明らかに内部に流れ込んだものの方が混入する礫は小さく、全体に細粒化している。

泥流中には大小さまざまな礫(多くは火山成の石であるがいわゆる丸みを持った川原石なども含まれる)が入り込んでいた。中には径が50 cmにも達するものもある。土質は砂礫質であるが微細な砂の他、やや粘性を持った土も含んでおり、予想以上に支持度は高い。今回の調査所見では建物の壁の遺存状態や、遺物の出土状況などから、ここ上福島中町遺跡における泥流の勢いは文献等から想像されているよりも弱かったものと考えられる。また流れの方向も必ずしも西側上流方向からに限られるの

ではないようで、建物によっては逆に西に向かって倒れこんでいる壁も確認されていることから、泥流は川の蛇行の状況や、溢れ出した場所の地形などによって渦を巻いたり逆流したりと様々な方向に流れたものと考えられる。

5. VI区1号建物跡の調査

本建物はVI区の東寄り、利根川岸からはおよそ30 mの場所に建てられている。南と東側に若干の畑が作られており、北側は約1 m程高くなった土手状になっている。この建物については極めて残りの良い状態で壁および柱跡などが確認されたことで特筆されるものであり、調査中観察された所見を改めて検討し、泥流の流れの方向や強さ、建物の埋没状況、建物の構造、遺物の置かれた位置などから埋没時の様子を考えたい。建物は北西部分にへやを持つ曲り屋で、この形状のものは調査された建物の中では唯一である。北東隅部分は後世の攪乱坑により壊されている。

建物の規模は東西の間口9.58 m、奥行き6.72 (3.84) mである。

本建物はVI区の調査開始後最初に検出された建物であったが、南側部分が現堤防の下に掛かっていたために、北側と南側の2回に分けての調査となった。

掘り下げを行ってゆく過程で壁の存在が確認されたため、その状態を残す形で調査を進めた。その結果、西側の壁および北側の壁が良好な状態で検出された。西壁は礎石から立ち上がり、厚さ約4 cm、高さ約1 mが残存していた、また柱に関しても、材そのものは失われてしまっていたものの、柱部分に細かい砂質土が入り込んでいたために形状が明瞭に残っていた。柱および壁の形状を保持するために、壁とともに泥流部分についても残して掘り下げを行った。壁部分の断面の厚さは3～4 cmで、柱部分は一辺約9 cmである。

壁の状況は西壁は上流から押されたように東側にやや倒れ掛かり、中位で折れて建物の内側に倒れこんでいた。また北側のへやの壁については泥流の勢いに押され、柱ごと大きく折れ曲がり、建物の外側に押し出された状況が観察された。

結果的に建物は、西側の壁は倒壊を免れたものの、全体としては北東方向にややねじれるように倒れこんだものと想像される。

また建物内部を仕切っていた壁も明瞭に残っていた。さらに建物内部には泥流中に板の間の痕跡を残す有機質の層が地面から約25 cmの高さで水平に残っていた。

建物内の施設については、中央やや北寄りに囲炉裏が設けられている。やや南北に長い長方形であるが、北東部分に小さなかまど状の作りを持つ張り出し部分が付設されていた。囲炉裏の規模は張り出し部分を含め1.4×

1.0mで現状での高さは約20cmである。構造は周囲に30cm前後のやや大きな石を並べて押さえとし、長方形に粘土を廻して構築している。内部は泥流で直接覆われ、その直下に灰、炭化物が互層に堆積し、最下層に焼土が見られた。

また置き竈が入り口の左手に検出された。縦90cm、横60cm、高さ約30cmの大きさで、鍋を置く部分は60cmの方形で、四隅に竈を作る際の芯材の跡と見られる3から4cmの穴が縦に空いている。上部には、かなり壊れた状態ではあるが鉄鍋が掛かった状態で出土している。鍋は破損が著しく、原状は留めてはいなかったが、良く見ると鍋の西側部分が内側に折れ込んでおり、この方向からかなり強い力で押された状況が観察された。この竈は検出時、焚口を東にして土間の南西の位置に置かれていた。内部には泥流が入り込んでいたが、火床面には灰層が残っており、内面は赤く焼けていた。

他の施設としては、土間の北側屋外に径50cm、深さ40cmの排水坑が検出された、内部には底から半分以上の高さまでAs-A軽石の堆積が見られた。ほぼ直立に掘り込まれており内面の壁に木桶の痕跡が見られた。

出土遺物は碗や徳利などの陶磁器類をはじめ鉢や焙烙、砥石、石臼などの石製品さらには鉄・銅製品が多く出土している。

陶磁器類は囲炉裏周辺部に集中する傾向が見られた。この他、コザ、ナンドの床下において蒔かれたように多量の銭（銅・鉄銭）が出土しており、小判を模した銅製模倣銭なども見られ注目される。

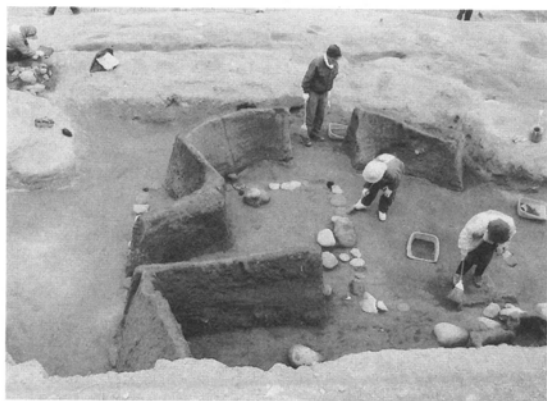


写真1 検出された壁および柱痕

建物北側部分を南から見る。高さ1mほど残された柱、壁である。壁の保持のために傾いた側の泥流を残してある。上端断面に白くつながって見える部分が壁。内側縦に幅9cm程に壁が溝状に切れた部分が柱痕、検出時には壁の土に比べ軟質で締まりの弱い砂質土が詰まっていた。

手前の西壁部分はやや東に傾いたものの良く残っている。この壁と直角に残る壁は部屋の仕切りである。この

角と東端には柱が確認されている。北側のナンド部分の西壁は折れ曲がり、北側・東側の壁は大きく外方向に押し出されている様子がわかる。この壁の一部分が切れているが、これは試掘時のトレンチによる。

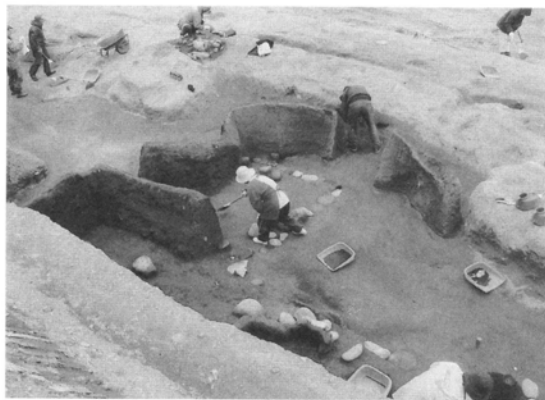


写真2 検出された壁および柱痕

写真1をやや東側から見たものである。北側に押し出された壁の内側に90cm程の間隔で柱痕3本が見られる。手前左側の高い部分は現在の堤防である。

建物の北側は一段高くなっているのがわかる。建物との間はかなり狭くなっており、面は硬く締まっていたことから日常頻繁に人が通っていたものと考えられる。



写真3 ヘヤの仕切り壁内側の状況

下から30cm程の高さの位置に土質の違いが観察され、横一列に半裁された竹の並びが痕跡として残る（竹スノコか）。この部分が床の高さと考えられる。その上には横方向にやはり竹材の痕跡が残る。ただし、この竹材痕は並びがやや乱雑で壁の間には泥流層が挟まっており（トレンチ状に掘ってある部分の奥に見えるのが壁面である）、壁に付随したものではなく、天井などに利用されていたものが下に落ちた可能性も考えられる。

ヘヤの仕切り壁をはずしたところ、西側の壁との隅に、押し付けられて二つに割れた状態で鉢が出土した。泥流により押されたのか、西側の壁が傾いた圧力に拠ったものかは明らかでないが、部屋の隅に立て掛けられていた



写真4 ヘヤの隅から出土した鉢

ものであろうか、地面から約30cm程の高さ（床面）で出土。大形の在地産捏ね鉢である。



写真5 壁面の近接写真

コザとナンドの仕切り壁の表面を平らにやや削った状態。淡黄褐色の砂質土中に長さ3～5cmの茶褐色の禾本科植物の茎状痕跡が認められた。壁土に混ぜ込んだスサと思われる。



写真6 壁の竹小舞痕

北側に大きく押し出された壁の表面を少しずつ削っていったところ、部分的ではあるが一边数cmの格子状に土質が異なっていた、壁下地の竹小舞痕と思われる。巻

きつけた縄などの痕跡は認められなかった。竹の部分は黒い砂壤土である。他の壁についても同様に確認を試みたが明瞭には認められなかった。



写真7 柱に打ち込まれた釘

ナンド北側に押し出された柱材部分の砂質土を取り除くと中央部やや左に先端部分が現れた、先端部に欠損は見られなかったが先端部分はかなりヤセタ状態であった。太さは最大7mm程で残存の長さは5cm以内である。家の外側から打たれている。地面から釘までの高さは約45cm程であった。柱部分に釘が残っていたのはこの一ヶ所のみである。



写真8 建物を埋めた泥流の断面

北側の壁部分を除去した建物の東西断面である。右側泥流下に白く堆積しているのがAs-A軽石である。建物内には全く見られず、雨落ち溝部分でやや厚くなっているのがわかる。

断面には内側に倒れこんだ壁の様子が明瞭に残っている。またヘヤの内部には床面と思われる高さで上下に土質の違いが見られる。

掘り上がった囲炉裏を上から見た状況である。上の石の並びは北側外壁の位置である。

囲炉裏は一边約90cmで粘土で方形に作られている。東側を除いた周囲に石が廻る。囲炉裏の東側は粘土壁が見られず、板で仕切られていた可能性もある。右側は土間

江戸時代天明三年の浅間山泥流に埋没した建物の調査から



写真9 検出された囲炉裏

である。また囲炉裏の北東部分が馬蹄形に作り出されている。

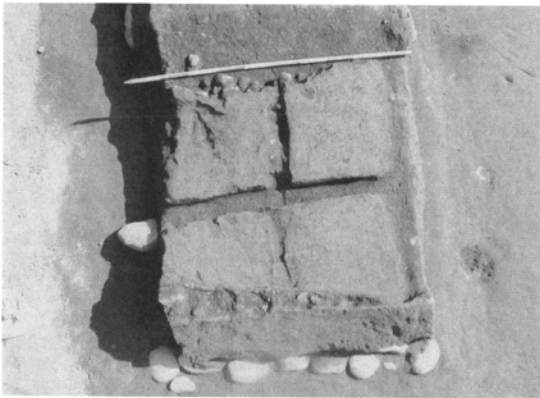


写真10 建物南側部分の壁の検出状況

建物の南西部分の状況である。上流から押し寄せた泥流の力によって内側に倒れこんでいる。西壁も上下三つに割れて内側に倒れこんでいる。切れた部分は貫板が渡されていたものと思われ、縦方向にも見られる。壁は南側にも50cm程の高さに残っている。

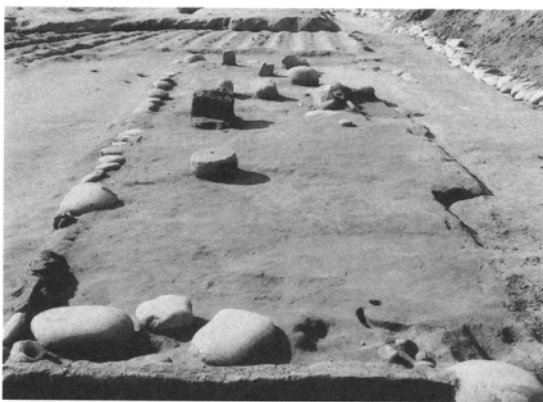


写真11 泥流除去後の建物南側部分の状況

検出した建物を東から見た状況である、北側はすでに調査が終了している。南側および東側の礎石上には根太

の存在が確認されている。建物手前側が土間で硬く踏みしめられていた。この土間部分では、壁や柱痕は明確な状況では確認できなかった。入り口付近には石臼(下臼)が置かれ、その西側には置き竈が見える。

南側は平坦な庭になっており、建物の礎石に沿って雨だれ部分が浅く溝状になっているのがわかる。西側には畑が見える。



写真12 出土した置き竈(へっつい)

長方形で東側に四角の焚口が見える、焚口手前は舌状に延びている。上には鉄鍋が掛かった状態で出土している。四隅に作る際の芯材の穴が見られる。内部には泥流が入り込んでおり、火床面には灰、炭化物が堆積し、内壁面は赤く焼土化していた。移動するためにおそらく板の上に置かれていたものと思われるが確認はできなかった。



写真13 建物南側の根太痕と倒れこんだ壁

南側の礎石上に渡された根太の痕跡(壁の左側礎石上の直線部分)と土間部分に倒れこんだ壁の一部。上が利根川方向で、壁は北東に向かって倒れている。壁の中央に貫板の痕跡が見られる。置いてあるポールの長さは2mで先端部分から右は板床の痕跡が見られる。写真下には囲炉裏の一部も見える。また、置き竈はポールの下で検出されている。

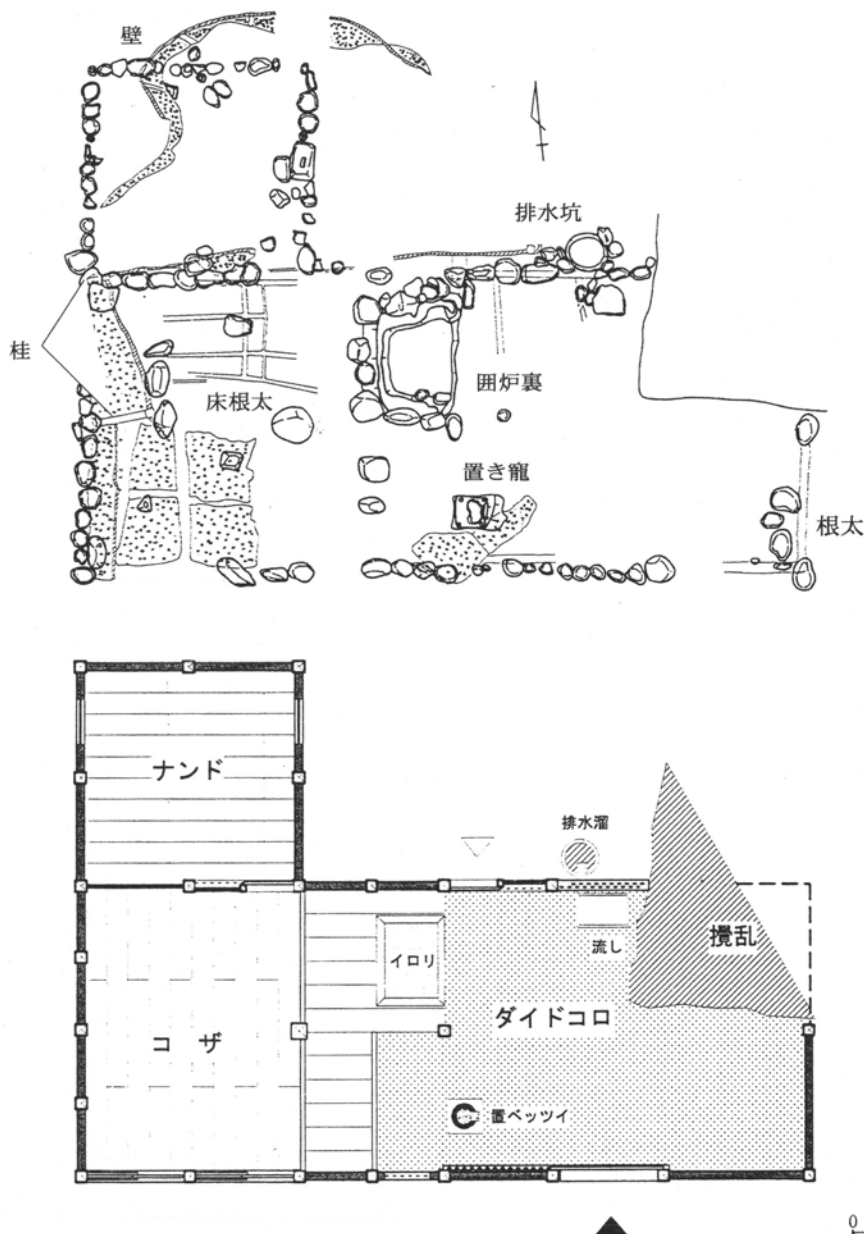


図3 VI区1号建物跡壁・柱痕検出状況および間取り推定図

6. おわりに

天明三年の浅間山大噴火とこれに伴って発生した泥流による被害は想像を絶するものであった。これまで文書に記された内容の検討などから、8月5日前後の人々の混乱の様子、人や馬などの被害数、さらには田や畑の面積などは知られているところではある。

発掘調査は泥流によって被害を受けた地域の範囲特定、被害後の復旧の状況などを明らかにすることの他、埋没した天明三年8月5日以前の村の様子(景観)、や出土遺物の検討から江戸時代後期の生活に関して多くの情報を得ることができるのである。

火山や地震による災害は人間の力では未だどうすることもできないものであるが、過去の被害の様子を知って

おくことは、今後必ずやってくる災害に対する備えとして欠くことのできないものであると考える。

同時に、天明泥流は江戸時代後期の地方の村の様相をつぶさに後世に伝えてくれているという皮肉な面を持っていた。上福島中町遺跡では江戸時代に関しては大きく2面の調査が行われ、遡ること41年前の寛保二(1742)年8月1日の洪水で埋没したと考えられる建物、道、畑が確認されており、天明三年の面で検出された建物、道、畑はその洪水層の上に作られていた³⁾。さらに、地元に残る文政四(1821)年(天明泥流災害の38年後)に描かれた絵図には泥流により埋まってしまった建物の上にほぼ地割りを同じくした屋敷図が描かれている。

利根川という大河川に近接して生活する人々の宿命と

はいえ、今日のように治水の整っていなかった状況の中で、その土地に対する愛着心と、繰り返す自然災害にも臆しない人間の力強さを感じずにはいられない。

註

- 1) 平成12年、本遺跡に隣接した場所で玉村町教育委員会により下水道管敷設工事に伴う発掘調査を実施。泥流下で建物跡を検出し、囲炉裏を調査、周辺で陶磁器類や銅製のヤカンなどが出土している。南側にあたる上福島中町遺跡においても同様な遺構の存在が予想された。
- 2) 萩原 進 1986 「浅間山天明噴火資料集成」II
- 3) この洪水層に埋没した建物、畑、道は約40cm下で検出されている。天明3年の面で確認された建物についても殆どが、洪水層の上に新たに建てられたことがわかっているが、Ⅵ区2号建物については罹災前の礎石を用いて再建していることが判明。

使用した図版および写真は群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第318集「上福島中町遺跡」2003より加筆転載。

引用・参考文献

- ・「玉村町の遺跡」1992 玉村町教育委員会
- ・群馬県立文書館 1983 浅間焼けの古文書展 「かきのこされた被害の実相」 群馬県立文書館特別展
- ・歴史公論 1983 「江戸時代の村」通巻95号第9巻10号
- ・歴史公論 1984 「近世の考古学」通巻99号第10巻2号
- ・玉村町誌刊行委員会 1991 「玉村町の建造物」玉村町誌別巻III
- ・玉村町誌刊行委員会 1992 「玉村町史」通史編 上巻
- ・渋川市教育委員会 1993 「中村遺跡」関越自動車道(新潟線埋蔵文化財発掘調査報告書)
- ・嬭恋村教育委員会 1994 「埋没村落 鎌原村発掘調査概報」—よみがえる延命寺—
- ・「天明の浅間焼け」1995 群馬県立歴史博物館
- ・井上公夫 1995 「浅間山天明噴火時の鎌原火砕流から泥流に変化した土砂移動の実態」こうえいフォーラムNo.4
- ・古澤勝幸 1997 「天明三年浅間山噴火による吾妻川・利根川流域の被害状況」群馬県立歴史博物館紀要 第18号
- ・井野修二 1999 「利根川の変流と民俗」群馬文化第257号
- ・群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 「遺跡は今」発掘された天明三年畑の特集 第10号
- ・小川町教育委員会 2000 「重要文化財 吉田家住宅その修理と調査の記録」
- ・原 真・中島直樹 2001 「埋没河川の景観復元」研究紀要19 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・中里正憲・中島直樹 2002 「江戸時代後期の埋没建物」群馬考古学手帳12
- ・群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 「遺跡は今」—上郷岡原遺跡の調査—
- ・群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 「上福島中町遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第318集
- ・群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 「久々戸遺跡・中棚II遺跡・横壁遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第319集